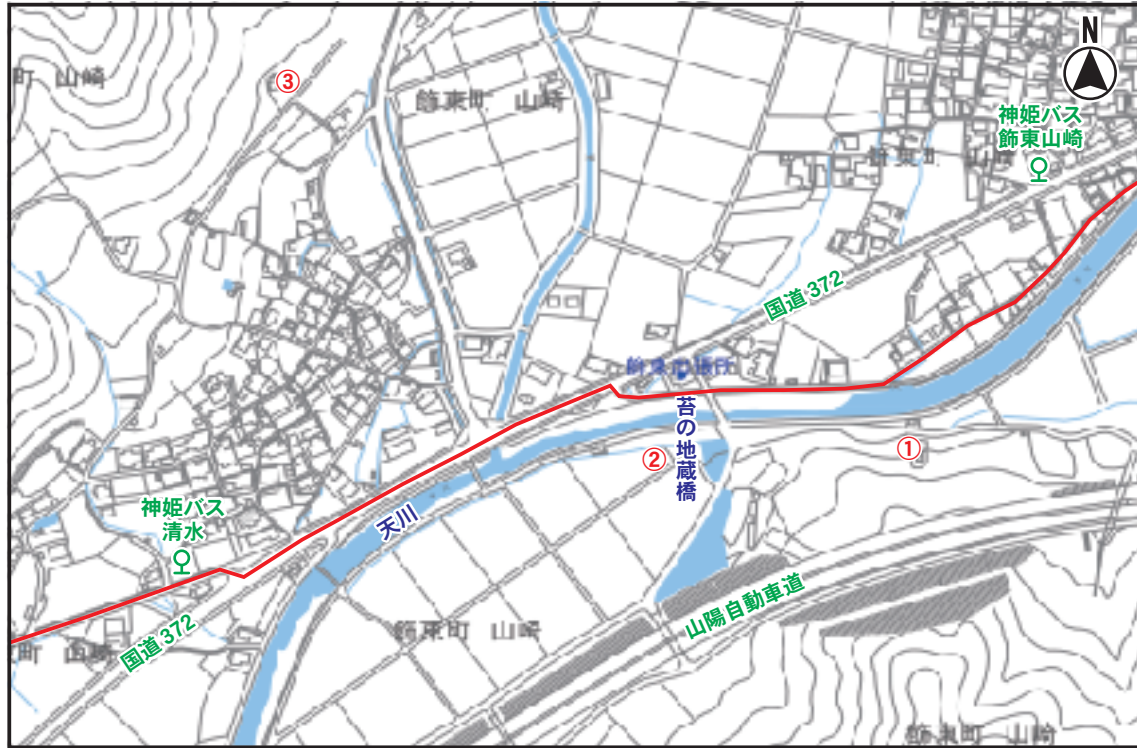


①山崎橋石段道標(亡失、「左ひめぢ」の刻銘があったという)



①苔の清水(守護赤松義村(1496～1520)が定めた播磨十水の一つ、「播磨鑑」に「星田庄山崎村ノ内二星田苔の清水ト云有」、現在飲料水には適さない)、苔の地蔵(地蔵堂内に石仏三体) ②児島神社 ③八王子神社(清水地区の鎮守、山崎の八王子神社から分霊を勧請したという)



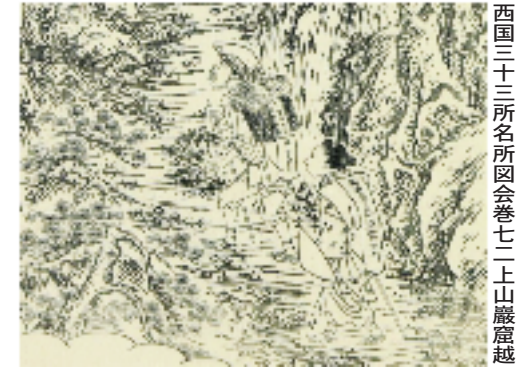
『西国三十三所巡礼道』をたずねてその1

三十三所観音霊場の巡礼(順礼とも記す)は平安時代に僧侶の修行として始まったことが記録上の初見であり、11世紀末に寺門派大僧正行尊が120日をかけ長谷寺から三室戸寺まで三十三所の観音霊場を巡礼(寺門高僧記四)し、次いで応保元年(1161)寺門派前大僧正覚忠が75日をかけ那智山から三室戸寺まで三十三所観音巡礼を行った(寺門高僧記六)。この時播磨の観音霊場は十二番清水寺、十三番一乗寺、十四番圓教寺であり、巡礼順を南紀那智山から美濃谷汲寺までと記す(現在の巡礼順となる)のは15世紀末である(天隠語録)。すでに永享年間(1429～41)には巡礼者が道に織をなすと記されるほど庶民の巡礼が盛況となり、三十三所巡礼起源としての徳道上人の閻魔王お告げ伝説や花山法皇創始伝説が広まっていた(竹居清事)。また三十三所に西国を冠するのは鎌倉末期に板東三十三所観音霊場が成立した(峯相記)ことによると考えられる。

江戸時代の西国三十三所巡礼者は年間約2万人と推定され、西国の人正月行事のあと3月まで逆順や最寄りの札所から、東国の人田植えの後8月まで伊勢参りのあと一番那智山から巡礼し三十三番谷汲寺で結願、さらに善光寺参詣をすることも多かったという。

巡礼者は納札・笥摺・笠や守り袋・往来切手・葉・飯行李を始め梅干し・胡椒に至る道中持ち物を携え、右上図のような装束で巡礼に向かった。彼らの多くが手にしたとみられる巡礼図に南都大仏前の絵図屋庄八版「西国三十三所巡礼道中図」(右中図、宝暦4年(1754)新版・天保14年(1843)改版)があり、札所(観音霊場)と巡礼宿(▲印)と朱で推奨ルートが示されている。一方、文化5年(1804)新版の京都書林竹原好兵衛版の道中図(右下図)は法華山一乗寺から「めいしよ道(名所道、高砂道)」で石宝殿、曾根の天神(曾根天満宮)を経て「まみざき(豆崎、高砂市阿弥陀町)」で西国街道に入り姫路城下から書写道で書写山圓教寺に至るルートを示し観光要素が多分に反映されている。

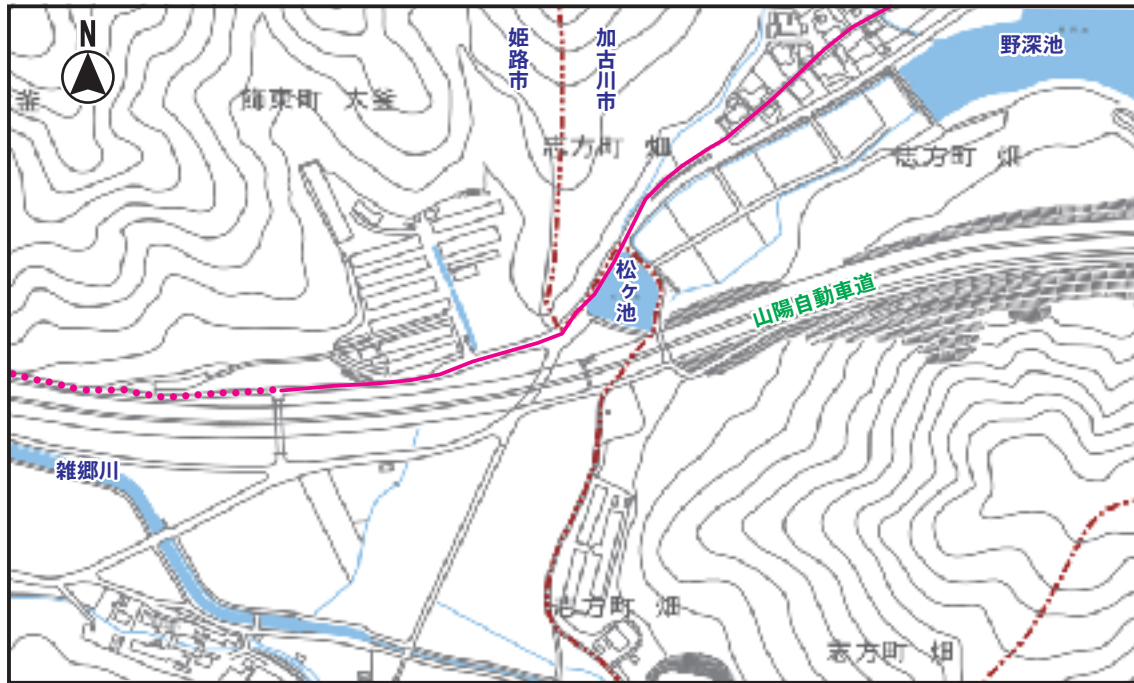
本見学シリーズでは右中図の絵図屋庄八版で市域の巡礼ルートをたどる。巡礼宿は二十七番書写山圓教寺まで、大かま(飾東町大釜)、かすがの(春日野、飾東町豊国・塩崎)、せう(飾東町庄)、ながしま(西中島)にあり、圓教寺から置塩坂を下り二十八番成相山成相寺に向かうと、をしほ(夢前町置塩)、まへのしやう(夢前町前之庄)に巡礼宿、前之庄から姫路市・福崎町境の板坂峠を越えると、いたさか(福崎町)、やかた(市川町屋形)の巡礼宿に至る。江戸時代の旅行は1日約30km(7里半)を歩行したといわれ、およそ1～2里ごとの巡礼宿を適宜利用していたのであろう。



西国三十三所名所図巻七上山蔵屋越

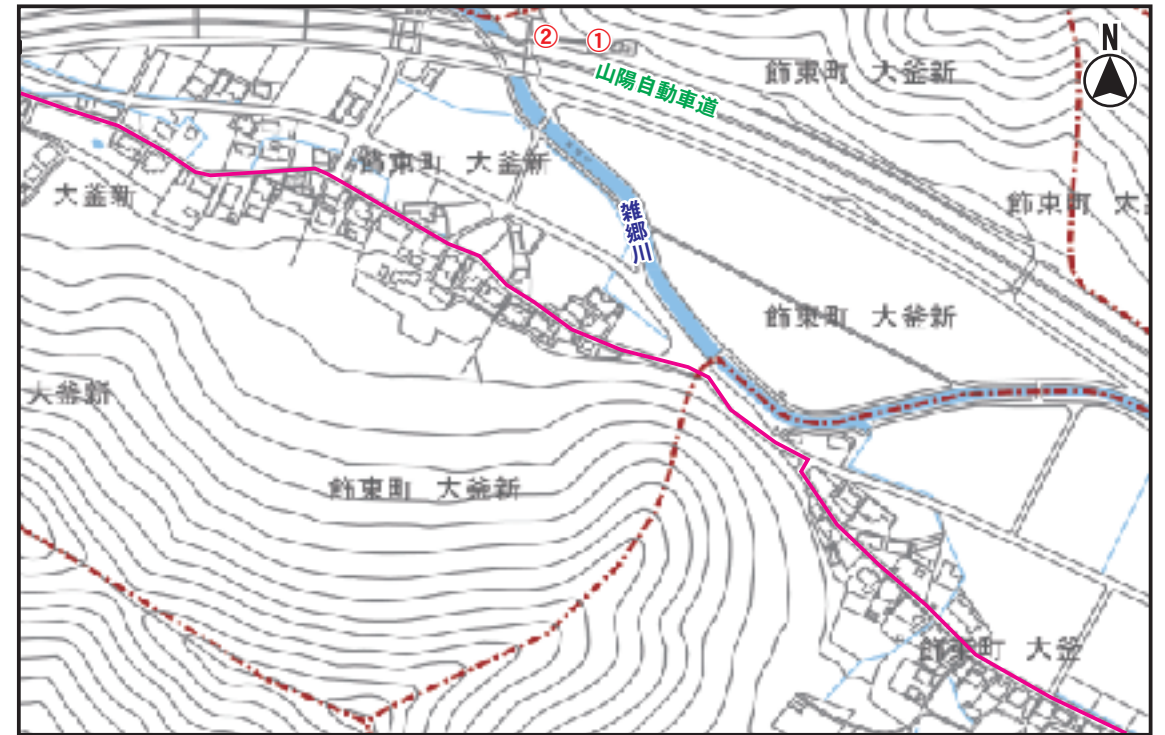


<図1>



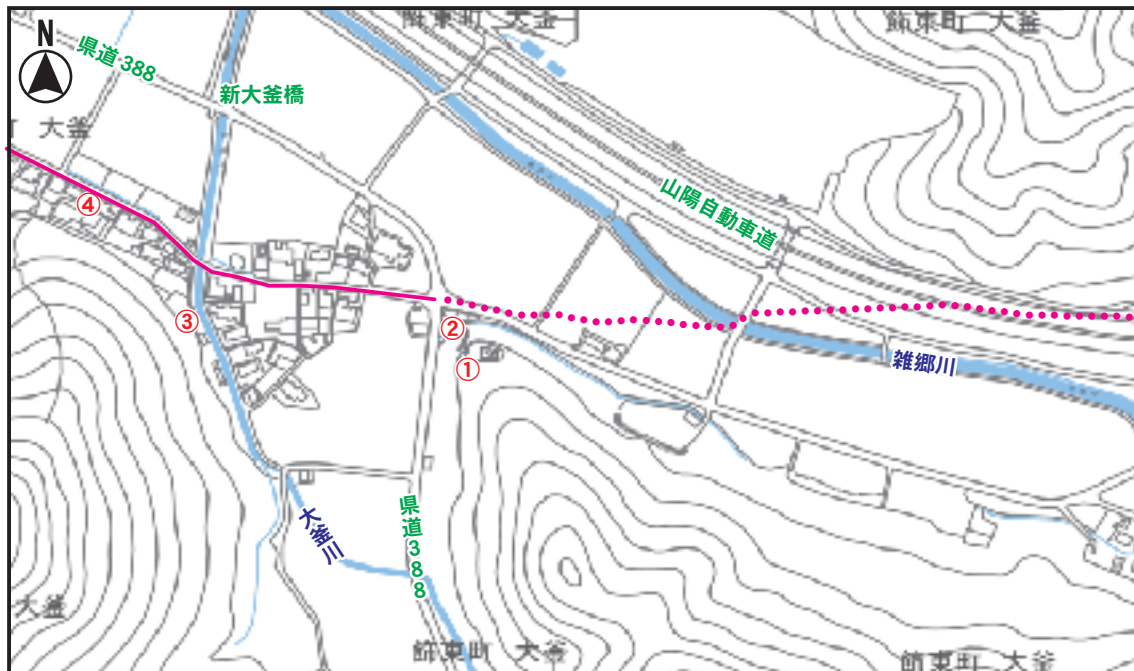
二十六番札所の法華山一乗寺(加西市坂本町)の西惣門を下る(県道206号)と、畑法華口の四つ辻(加古川市志方町畑)、県道515号との交差点に文政4年(1821)道標があり、四面に「直法華山道 直書写山道 すくめいしよ道(すぐ名所道) すくたしま道(すぐ但馬道)」の刻銘があり、「直書写山道」刻銘左右に「すくしよしゃさん」「ひめち」の刻銘がある。絵図屋庄八版巡礼道中図は「書写山道」、京都書林竹原好兵衛版巡礼道中図は「名所道」を推奨しておりこの地点が分岐点となる。図1は書写山道をたどり畑(加古川市志方町畑)と大釜(姫路市飾東町大釜)の境界地点である。

<図3>



①天満神社(大釜新の鎮守、旧村社格) ②天満神社参道入口(宝暦5年(1755)石鳥居残欠)

<図2>



①八幡神社(大釜の鎮守、旧村社格、天保6年(1835)手洗石) ②八幡神社参道入口(元禄11年(1698)覚園大徳靈位板碑)
③地藏堂(背面に地藏立像道標(舟形光背型、右やま道、左法花山道)、五輪塔・一石五輪塔残欠) ④大師堂

<図4>



①旧飾東・印南郡境(清住川を渡河すると旧飾東郡に入る) ②巡礼道・丹波道分岐点(雉子端の谷内公園南側、合羽屋・紅屋等の宿があったという) ③六十六部廻国供養塔(八重畑廻国塔、嘉永元年(1848)、願主当村伊左衛門、『石造遺品銘文集』P.127、倒壊) ④春日神社(八重畑の鎮守、旧村社格、天保12年(1841)石燈籠一对、文政11年(1828)庄屋河本彦次郎弥信碑、文久2年(1862)大庄屋内海左太夫碑、『石造遺品銘文集』P.513註1,4)